

## ○ 病害虫防除法（野菜共通）

### 1 総合防除の基本的考え方

野菜は作物や作型の種類が多く、病害虫の種類も多い。近年は天敵の利用や土壌還元消毒などの防除も増加しつつあるが、今なお化学農薬による防除が大半であり、薬剤抵抗性害虫や耐性菌の発生など防除が困難になっているものもある。

このような中、鹿児島県では近年の多様化した病害虫の発生状況に対応するとともに、化学農薬に頼りすぎない、環境に配慮した適切な病害虫防除対策を推進するため、植物防疫法（昭和25年法律第151号）に基づき、「鹿児島県総合防除計画」を令和6年3月に策定した。今後、発生予察に基づいた「総合防除計画」の推進とともに、安心・安全な農作物生産のために農薬の適正使用の徹底を図り、総合防除に基づいた防除を推進する。

#### （1）病害虫の発生しにくい栽培環境の整備

- ・ほ場周辺の雑草管理
- ・ほ場の排水対策
- ・ハウスの換気と多湿の防止

#### （2）生物的防除

- ・B T剤、拮抗微生物、天敵昆虫、捕食性ダニなどの生物防除資材の利用

#### （3）物理的防除

- ・防虫ネット、紫外線カットフィルム及び反射資材の設置による害虫の侵入防止
- ・太陽熱消毒や湛水による土壌病害虫の防除
- ・栽培終了後の蒸込みによる害虫防除と作物残さの持ち出しによる病原菌の密度低下

#### （4）耕種的防除

- ・抵抗性品種
- ・台木の利用
- ・輪作等による土壌病害虫の密度低減
- ・発病茎葉、発病果実等のこまめな持ち出しによる病原菌の密度低下
- ・作物残さの腐熟促進による土壌伝染性ウイルスの不活性化

#### （5）効率的な農薬の使用

- ・性フェロモントラップや粘着トラップ等を用いた発生状況の把握による適期防除
- ・薬剤のローテーション使用による薬剤抵抗性害虫や耐性菌の発生抑制
- ・I G R剤や株元施用剤等の天敵等に影響の少ない農薬の利用

#### （6）除草剤に頼らない草生管理

- ・マルチ資材による被覆や耕耘による除草剤の散布回数低減

## 2 施設における省力防除法

### (1) くん煙剤、蒸散剤、くん蒸剤

#### (防除のねらい)

- ア 自燃式くん煙剤  
点火芯・点火紙などに着火して、薬剤自体が燃える
- イ 蒸散式くん煙剤  
蒸散器で使用する

#### (注意事項)

- ア 夕方気温が上がらなくなってからハウスを密閉して処理し、翌朝開放する。
- イ くん煙中は入室しない。また翌日も十分換気した後に入室する。
- ウ 薬量を決める場合のハウス容積については、通常のパイプハウスの場合、高さを2 mとして算出すればよい。
- エ くん煙剤は、防除作業の省力化、また曇雨天中の水を使わない防除などメリットがあるが、効力不足となる場合もあるので、散布による防除と組み合わせて利用する。
- オ 薬剤により、使用方法・量などが異なるので、使用方法や注意事項をよく読んで使用する。

## 3 受粉用昆虫に対する薬剤散布上の注意

### (1) ミツバチ

#### (使用上の注意)

ミツバチは他の昆虫（害虫）に比べ、農薬（特に殺虫剤）に弱く、訪花活動が著しく低下したり、死亡することもあるので特に注意する。また、病害虫の防除はミツバチ導入前に徹底するのが基本であるが、導入後やむをえず薬剤散布を行う場合は以下に留意する。

- ア 薬剤を散布する場合は散布前日の夕方もしくは当日の早朝にミツバチの巣門を閉めて、巣箱から出ないようにして施設外へ移動し、薬剤散布を行う。
- イ ミツバチを再放飼するまで期間を必要とする薬剤があるので、この期間は巣箱を施設外に出しておく。また、ハウスはつとめて換気をはかり、農薬の臭気を早く外へ発散させることが大切である。

### (2) マルハナバチ

#### (使用上の注意)

マルハナバチは、ミツバチと同様に、農薬（特に殺虫剤）に弱く、散布によって訪花活動が著しく低下し、死亡することがあるので、農薬散布は放飼前に行う。放飼後は比較的影響の少ない農薬を選択するとともに、散布前に巣箱は外に出しておき影響がなくなってから搬入する。